

お尻をすりすりと撫でてくる感触に足が震えた。満員電車の中で、偶然ではなく明らかに故意に触っている男の人の手の感触に、何の抵抗もできずただ俯く。

（うう……や……やだ……、何で……痴漢なんかに……っ、僕……男なのに……っ）

男の僕が痴漢に遭うのはこれで三回目だった。自他共に認める平凡顔で、普通に何処にでもいる男子学生として平凡に過ごしてきた僕は、当然それまで痴漢なんか遭った事も男にお尻を触られた事もなかった。

けれど一カ月程前にとある病気に罹ってしまってから、その間に三回も痴漢に遭ってしまっている。

（痴漢に遭うようになるなんて……先生もそんな事言っ
てなかったのに……っ、カントボーイ病って……アソコ
が変になるだけじゃなかったの……ッ？）

カントボーイ病は男性の性器がある日突然女性の性器に変わるという病気だった。とても珍しい病気だけど、処方された薬を毎日飲み続けていれば半年程で治ると専門の医師からは言われていた。

けれどその専門医ですら、カントボーイになったら痴漢に遭いやすくなるだなんて事は一切言っていなかった。今度の検診の際には必ずその事も話しておこうと決意しつつ、お尻を撫でる手の感触から必死で気を逸らそうと

する。

(ううう……気持ちわるい……っつ、で、でも……ちょっと触られるくらい耐えないと……ッ)

男が痴漢に遭ってるなんて周りの人に知られる訳にはいかない。どうせ電車に乗ってるほんの少しの時間耐えるだけだ。ちょっとだけお尻を触られたり、それから胸を触られたりするけどそんなのどうって事ないと自分に強く言い聞かせた。

「ッッ！！？」

その時不意に電車が、駅に着いた訳でもないのにブレーキをかけた。大きく金属音が鳴り響き車内が揺れる。突然のブレーキに不意をつかれた乗客達が揉みくちゃになり彼方此方で悲鳴が上がった。

僕も前の人に押されて転びかけたところを、思いがけず痴漢していた男性に抱き止められる。しかもその際に痴漢の男性の顔が目に入り、不覚にも心臓が跳ねてしまった。

どうしてこんなイケメンが痴漢なんかしてるんだろうと驚くくらい、男性の顔面は整っていた。

「大丈夫？」

僕を痴漢してきた男性は、そんな事実全く無かったかのように爽やかに話しかけてくる。

僕も、彼が今さっきまでお尻を触っていた人物でなければちゃんとお礼を言っていたところだけど、自分を痴漢してきた男性にどう返していいのか分からず結局何も言わずに背を向けてしまった。

止まったまま動かない電車で車内が騒めいているとアナウンスが流れる。どうやら二つ先の駅でトラブルがあったみたいで暫く停車するという内容だった。

放送が終わると途端に乗客の文句を言う声やため息やらが聞こえてくる。会社か何処かに電話をかける声なんかも聞こえ、そんな騒めきの中すぐ後ろからの「ふ～ん」という小さな声がやけにハッキリと耳に届いた。

「結構長く止まりそうだな。……だったら、今日はじつくりと触らせてもらおうかな」

『今日は……？』その部分が気になって後の言葉を聞き流してしまった。直後に先程お尻を触っていた手が前に回ってきて身体が硬直する。

「ツツ……！！？」

左手が胸を覆い、右手が股に触れてきた。

（あっ、あっ、……っっ！　っや……、そ、そこは……っっ）

左手が胸を撫で回し、右手がすり…♡すり…♡と股を摩った。

実はソコを触られるのは初めてだった。これまでの二回とも、お尻を触られたり胸を触られたりした事はあった

けど、その部分は痴漢はおろか自分でも恥ずかしくて必要最低限しか触ってこなかった。

初めて、性的に触れてくる手に背筋がゾクゾク…♡と粟立つ。

（っ……うう……っ、バ……バレちゃう……っ、僕のアソコ……女の子になってるのバレちゃう……っ♡）

元々そんなに大きくはなかったけど、流石に男性器と女性器の違いを気付かれない訳がなかった。

案の定男性は僕のアソコを触って「アレ？」と首を傾げる。

「君、女の子……じゃないよね？ あ、もしかしてアレか、カントボーイ病……だっけ？ 男のココがおまんこになるっていう……」

「ッッ……♡ う……うう……っ♡」

（お……おまんこって……ッ♡）

恥ずかしい単語を囁かれながらソコをすり…すり…♡と撫でられて色んな所がじわわ…♡と熱くなった。

羞恥に俯く僕にお構いなしに男性は手を動かしながら「そっかあ」と言葉を続ける。

「前の二回は時間なくてココは触れなかったんだよな……もしかしてアノ時からおまんこになってた？ 俺におまんこ触られるんじゃないかってドキドキしてたのかな？」

耳に甘い声を囁きながら右手をゆっくりと動かす。左手

は胸の中心にある突起をぐりぐり♡と押し潰していた。

「や……やめ……ッ♡」

いやらしい手つきに身体がどんどんと熱くなっていくのを自覚する。その上耳に囁かれる男性の言葉は、以前の痴漢も二回とも彼が犯人なのだと堂々と教えていて余計に熱が上がった。

（な……何で……っ♡ こんなイケメンが……僕相手に痴漢なんて……ッ♡）

しかも三回もーっ。前の時はずっと下を向いてて痴漢の容姿なんて全然目に入らなかった。それがこんな、痴漢なんかする必要ないだろうくらい男女問わずモテそうな容姿の男だったなんてと混乱する。

僕がカントボーイだとは知らなかったみたいなので、物珍しさに触ってきた訳ではないのは分かった。なのにこんな平凡顔の僕を三回も痴漢してくるなんて、このイケメンが何を考えてるのかさっぱり理解できなかった。

「緊張してる？可愛いね。……前はさっさと降りておまんこ触れなかったからな……今日はたっぷりと、君のおまんこ触ってあげるね？」

「やぁ……っ♡ つひう……ッ♡」

そういやらしく言って、男性の右手が僕のズボンのファスナーをゆっくりと下ろす。僕はそれを見ている事しかできなくて、指が開いた隙間から入っていくのも震えながら見ているだけだった。

「ココ、自分では触ってみたのかな？」

「っんゝん……ツツ！♡」

耳にそう囁かれるのと同時に下着越しにコリ…ツ♡と
“ソコ”を撫でられる感覚がした。

その瞬間走る淫らな衝撃に咄嗟に口を噤む。

（ツ……！そ……そこは……ツ♡　〜〜〜くツ、くり
と……………ツツ♡♡）

知識だけはあった、自分では触れる事はおろか見る事すら避けていた場所を、男性の指が更にコリ…♡コリ…♡と擦る。

「っ……っ……、ンン……っ♡　や……っやゝめ……、ツツ……………♡♡」

コリ…♡　コリ…♡　コリ…♡　コリ…♡　コリ…♡　コリ…♡　コリ…♡

「ふ……ツ♡ふう……ふう……、っんうう……っ♡♡
はあ…っ♡はあ…っ♡　んふ……んうゝうう……♡♡」

下着の上から軽く擦られているだけなのに、すごい快感が襲ってきた。『こう』なる前の、自分でチンコを擦ってオナニーしていた時よりもずっと気持ちいい感覚に声を堪えながら戸惑う。

（ク……ツ、クリトリスって……こんなに気持ちいいの……ツツ？♡♡　ち……ちんこ弄るよりも、きもちいい……っ♡♡）

こんなに小さなお肉なのに、チンコを弄る時の何倍も気

持ちよかった。

クリトリスの快感に驚く僕に、小さなお肉をピンポイントで指で摩りながら男性が囁きかける。

「あんま慣れてないみたいだね。っていうか初めて……？自分では触ってなかったのかな？ クリトリス弄られてビクビクしちゃって……敏感なんだね」

「ふう♡ ふう♡ ふう♡ ふう♡ ふう♡ や……♡っやぁぁ……っ♡♡」

男性の言葉に恥ずかしくなり指から逃げようと腰を揺らすけど、それぐらいじゃ男性はクリトリスを逃してくれなかった。むしろカシカシカシカシ……♡♡と爪を当てられ一層の快感を与えられる。

「はぁ…はぁ…♡ ツツ……！♡ ふ…ツ、うんんん……っ♡♡」

しかも反対の左手では乳首をくに♡くに♡と摘んできいていた。クリトリスを弄られて身体が熱くなってるから、そんな所まで普段よりも敏感になってしまっている。ぷっくり勃起上がった乳首が摘まれ捏ねくり回される。

（ああ……や、やだ……っ♡♡ おまんこ……っ♡僕のおまんこ……濡れてきちゃってる……ツツ♡♡）

とろ…とろ…とろ…♡と自分のソコから愛液がこぼれている感覚がした。温かな液体が、下着をいやらしく濡らしていく感触がおまんこから伝わってくる。

今まで経験した事のない愛液を漏らす感覚にまた頭が混

乱する。チンコの先から出すのとはまるで違うそれに脚がプルプルと震える。

(やだ……♡やだ……♡愛液とまんない……っ♡♡
パンツ……どんどん濡れてっちゃう……っ♡♡)
クリトリスをカシカシカシカシ……♡♡と引っ搔かれ、
乳首をくに♡くに♡と摘まれ、おまんこから溢れ出る愛
液を止めようと思っても全然止まらなかった。

僕がおまんこを濡らしている最中、車内からは何処かに
電話をしている声が微かに聞こえてきた。
周囲からちらほらと聞こえてくる声や物音にここが電車
の中で、自分はこんな大勢の人がいる中でクリトリスと
乳首を弄られおまんこを濡らしているのだと分からされ
る。

(っ……で、電車の中で……っ♡こんなエッチなことさ
れるなんて……っ♡ ぼく……女の子とすらエッチし
たことないの”に……ッ♡♡)

キスすら未経験な自分が電車の中でイケメンに痴漢され
てるなんて信じられなかった。

ファスナーから忍び込む指が中でいやらしく動き、反対
の手がシャツの上から乳首を摘むのを声を堪えながら見
つめる。

(で、でんしゃ……まだ動かないの”……っ？♡ は……
はやく……動いて……っ♡♡)

もう体感では30分くらい経った気がするけど、電車は
一向に動く気配を見せなかった。

僕の願いも虚しく電車は全く動かず、代わりに男性の指は遠慮なく動いて敏感な上下の突起を責め立てる。

コリ…♡ コリ…♡ コリ…♡ コリ…♡ コリ…♡ カシ
カシカシカシカシ……♡♡ むに♡ むに♡ むに♡ む
に♡ むに♡ くにゅ♡ くにゅ♡ くにゅ♡ くにゅ♡
くにゅ♡

「ハア°…ハア°…、っっ……♡♡ ん° んん°……ふっ……
♡ っ……うん° んん°……っ♡♡」

クリトリスを擦ったり引っ搔いたり、乳首は左右交互に摘んだり捏ねたりといやらしく弄り回した。乳首も勿論気持ちいいけど、初めて経験するクリトリスの愛撫は全身に甘い快感を駆け巡らせた。

（ああ……だ、だめ°……♡♡なんかクる……ッ♡ おまんこスゴく熱いい……っっ♡♡）

射精する時にも似た——けれどそれよりもずっと強い感覚が身体の奥から湧き上がってくる。きっとコレが、女の子の“イク”という感覚なのだと自然と理解する。

（あ° あダメ°……電車の中なのにイッちゃう°……♡♡
こんなのダメなのに°……♡知らない人にクリトリスい
じられてイカされちゃう° う……っっ♡♡♡）

クリトリスをカリカリ♡と引っ搔かれて、駄目だと思いつつこみ上げてくる熱に身を任せようとした。

（っ……え……？♡♡）

けれど、イこうとしたその時に指はクリトリスから離れてしまい拍子抜けする。開いたファスナーから抜けていく指を、目を見開きながら視界に入れた。

「このままクリトリスでイかせるのは簡単だけど、それじゃあちょっと味気ないよね」

もっと気持ちよくなれるようにイかせてあげるね、と男性はそんな勝手な事を言って、クリトリスを弄っていた右手を胸へと持ってきた。

カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ……♡♡♡

「ッッ~~~~~！！！！♡♡♡」

そして左右の手で乳首をたっぷりと引っ搔いてきた。

くに…。♡くに…♡くに…♡くに…♡くに…♡くに…♡
ぐりぐりぐり♡♡ むにむにむにむにむにむに……♡
♡♡

更には引っ搔くだけに留まらず、押し潰したり摘んだり、捏ねくり回したりと両方の乳首と一緒に嬲られる。
（っなゝ……なんで……っ♡♡ そんなゝ、ちくびばかり……ッッ♡♡）

乳首から快感が拡がる。気持ちいい。気持ちいいけど……
あと少しでクリトリスでイけるところだったのに、それを急にに取り上げられて身体がついていかなかった。

むしろ乳首の、気持ちいいけどイクには少し足りない快感が全身を甘く苦しめる。

「ふ~~~~っ♡ふ~~~~っ♡　　っうん　　うう
う……ッ♡♡　　ふっ……うふううう……っ♡♡
♡」

（ち……ちくび♡やだ……ッ♡♡　ちくびじゃいけないよお……っ♡♡　くっ、クリトリス……ッ♡♡クリトリスいじってえええ……っ♡♡♡）

くに♡くに♡くに♡くに♡くに♡くに♡くに♡くに♡くに♡くに♡
に♡　こり♡こり♡こり♡こり♡こり♡こり♡こり♡こり♡こり♡こり♡
り♡こり♡

心の中で叫ぶけど男性には届かずひたすら乳首を弄ばれた。硬く膨らんだ突起はシャツからくっきりと浮き出て、それを男性の指が容赦なく摘んで捏ねる。

（やゝだ♡　やゝだ♡　やゝだ♡　やゝだ♡　ちくびもうやゝ
ダ……ッ♡♡　クリトリスいじって……♡♡クリトリス
いじってイかせてええ……っ♡♡♡）

乳首がジン…ッ♡ジン…ッ♡とこれ以上ないくら熱く痺れていた。乳首の甘い熱によりクリトリスも、さっきまで弄られていた甘い熱が引かずジン…ッ♡ジン…ッ♡と痺れる。

一ヵ月前に突然僕のソコにチンコの代わりに生えていた突起が、チンコよりも熱く切なく疼き自分も弄ってほしいと淫らに訴える。